

## 重荷

東京都・33歳・団体職員

新名知子

今昼休みです。あなたは職場の人たちと、私が節約するために作ったお弁当を食べ終わった頃でしょうか。私はお弁当を食べ終えて、近くのコーヒー店でクラシックの曲が流れてくるのを聞いています。一息ついて、あなたのことを想っています。

本当は子どもが小さくても、あなたとこういう時間を持つべきではないか、と時々思うのですが、忙しさにかまけて私の方から言い出せず、子どもにばかり手をかけていて申し訳ありません。あなたがいなければ、いとしい3人の子どもたちとも出逢えなかったはずなのに、毎日あなたを笑顔で迎えることすらできないでいる私。なぜなのでしょう。

そもそも、私は親から逃れたいがために一人暮らしを始めました。が、その孤独の中であなたと偶然出逢い、結婚もせずに、お互いの貧乏を理由に一緒に暮らすことを私の方から要求しました。頼まれもしないのに、暗い過去からあなたを解放して守ってあげたく、身のまわりの世話などおせっかいもし始めました。

また、私よりもはるかに多い読書量をもつあなたといると、いろいろ勉強になるのではないかと、という幻想も抱いていました。でもやはり自分で読み、考えなければダメですね。勝手にあなたの母親代わりになって、私自身に対する依存心を高めてしまったのは私なのに、3人の子の世話におわれる毎日の中、あなたに頼られすぎることが重荷となり逃れたくなる時があります。

でも、偶然私が主たる生計者となることにより、お互いすこしずつ、自分のことは自分で自覚をもつようになつた気がします。自分の世界を大切にしながらお互いの助け合いを必要としてうまく調和させて生活していく、これはとても難しいことだと思いますが、家族をもってしまった者にとっては永遠の課題ですね。

いずれ巣立っていく子どもたちがいなくなった時、今よりもっと色々なことが分かちあえますように。そのためには今ひたすら協力し合うのみね。

※今はとても夫に見せられませんが、あと30年位たったなら（もし一緒にいたら）見せてもいいかな。